



写真-1 猩々池（令和5年10月撮影）

■ 想像以上に埋まっていた猩々池

写真-1 は、宇治川（うじかわ）上流にある猩々（しょうじょう）池を撮影したものです。宇治川は表六甲河川の一つで、再度（ふたたび）山中に源を発し、大倉山の東を流れ、弁天浜^{※1}（ハーバーランド東側）に注ぐ延長 2,265m の二級河川です。

市街地を流れる宇治川は三面張り^{※2}で、山手幹線の橋樑から下流は暗渠になっていますが、上流の再度谷川沿いの道（大師道）は休日ともなれば多くのハイカーで賑わっています。筆者も上の写真を撮るために猩々池まで歩いてみようと思いましたが、諏訪山公園西の登り口から猩々池まで上りの約 2.7km はかなりきつそうなので、無理はせずバスで行くことに。中山手 3 丁目バス停で森林公園行きの市バスに乗り、15 分ほどで二本松バス停に到着、そこから等高線沿いの二本松林道を歩くこと約 15 分で猩々池に着きました。事前に写真を見てはいましたが、着いてビックリ！想像以上に池が埋まっていました。それでも、わずかな水面でカルガモが 5 羽泳いでいました。

池の末端付近には、文政元（1818）年 8 月に建てられた石碑「猩猩池の碑」（写真-2）があり、近くの説明板には以下のような説明が記されていました。

「摂津の国、八部（やたべ）郡福原荘四力村の地は、みな土地が高く水が乏しいので、日照りの年はいつも村民は苦勞した。花隈村長の村上尚善はこれを心配して寛政 2（1790）年村民を集めて相談し、貯水池を造ることにした。しかし意見が一致せず、数度の請願にも役所の許可が得られなかった。正しい筋道を好み、慈愛深く、国に役立つ志の強かった二茶屋村長の橋本邦直は、文化 12（1815）年村民の意見をまとめ、代官の許可を得て 6 月に着工した。翌年 8 月、水深約 24m、南北約 117m、東西約 68m の池が完成した。尚善の建議以来 26 年が経っていた。老人たちは池の完成を喜び酒樽を用意し、池のほとりに代官を迎



写真-2 「猩猩池の碑」

え、猩猩の謡曲で宴に興をそえた。これによって代官はこの池を猩猩池と命名し、荒井公鹿に銘をつくるように言われ、公鹿が事業を讃える詩文をつくった。」

※1 弁天浜：平清盛が祀ったという兵庫七弁天の一つに花隈弁天があったが、戦国時代に織田信長方の城として花熊城を築く際に生田神社に移し、天明年間（1781～1789年）に宇治川河口の弁天浜に移したという。

神戸市中央区花隈 6 丁目に「花隈の弁天さん」と呼ばれている厳島神社がある。御祭神は市杵島姫命と大物主命で御由緒は以下のとおり。

約 800 前、平清盛が福原京を造営した時、清盛が崇敬していた広島厳島神社より七社を神戸に勧請した中の一社と伝えられている。もとは宇治川尻（左岸）にあったが明治の初年頃、神戸港を建設するにあたり、現在の中央郵便局の所に移った。その後、中央郵便局ができるため、現在の花隈に移遷鎮座した。その名残が鳥居には「神戸最初船場鎮守」との額が掲げられている。宇治川（暗渠）と国道 2 号の交わるあたりが弁天町となっているのは、厳島神社がそこにあったためである。



写真-3 花隈・厳島神社

■ いにしえの宇治川

現在の中央区は、奈良時代の地名でいうと摂津国菟原（うはら）郡（夙川から旧生田川まで）と八部郡（旧生田川から須磨まで）の一部に当たります。このうち、八部郡の旧生田区域には、生田郷・神戸郷・宇治郷（うじのこう）という 3 つの郷※2があり、宇治川の名前は宇治郷に由来しています。

戦国時代の末には、宇治野村・走水（はしうど）村・花熊村※3などの村々ができます。この地域では、豪雨の際、宇治川の水が渦をなして流れるため、「走りウズ」といったのが「ハシウド」に転訛したといわれ、水害をもたらされた川沿いの村が「走水」という名にしたと伝えられています。



写真-4 走水神社

走水村は、明治元（1868）年に神戸村・二茶屋村（ニツ茶屋村とも記す）と合併して神戸町となり「走水」の地名はなくなりましたが、元町通 5 丁目の「走水神社」（写真-4：平安時代創建）にその名残をとどめています。

『奈良朝条里図断簡』によると、宇治川は今の再度筋を流れ、花熊の断崖から滝をなして流下していたといわれています。当時の宇治川は宇治野山（神戸海洋气象台跡地）の東（再度筋）を流下し、花熊において「宇治川」、「水流」、「頭滝」、「華尾堺」の記述となり、その断崖から今の海岸に流れ込んでいたそうです。断崖下に走水村が残り、走水神社が元町通 5 丁目に鎮座しています。走水村の伝説によると「隣村二茶屋村領字御所坂の下、清水の田地に水押し強く水勢烈しく流れ落つる」故に走水の村名を得たとあります。

※2 郷：奈良時代、律令制における地方行政の最下位の単位として、郡の下に里（り、さと）が設置された。里は 50 戸を一つの単位とし、里ごとに里長を置いた。霊龜元（715）年に里を郷（こう、さと）に改称し、郷の下に新しく設定した 2～3 の里を置く郷里制に改めた。しかし里がすぐに廃止されて郷のみとなったため、郷が地方行政最下位の単位として残ることになった。中世・近世には、郷の下に更に小さな単位である村（惣村）が発生して郷村制が形成されていった。これに伴い律令制の郷に限らず一定のまとまりをもつ数村を合わせて「〇〇郷」と呼ぶことがある。

※3 花熊村：花熊・鼻熊・華熊とも書き、「往昔は土東岨を嚙み」といわれ、海に面した小高い丘であった。台地の端（ハナ）の一段と高いところ（クマ）からついたという説がある一方、神をクマというところから神内（くまうち）に対し神社領のはすれという意味だという説もある（西撰大観）。現在の地名は「花隈」であるが、中世・近世はもっぱら「花熊」として史料に登場する。

■ 断層運動により右横ずれして流れる宇治川

いにしへの宇治川が今の流路をとるに至った時代は不明ですが、ただ、原因の一つが諏訪山断層の西への延長線上に位置する会下山（えげやま）断層ではないかといわれています。図-1 の活断層分布図からもわかるように、宇治野山の北西縁を宇治川の流路に沿って走る会下山断層は、断層の南東側に大倉山や宇治野山といった標高 30m 余の小丘があるのに対して、北西側は陥没状の低い小盆地となり、諏訪山断層とは逆に海側が隆起する運動をしています。

大倉山の東側でこの丘陵地を切断して南流する宇治川は、会下山断層に沿って屈曲しており断層の右横ずれ運動をも伴っています。

今の宇治川本流は、再度谷を流れ下った水が宇治野山にぶつかり、宇治野山に沿って南西方向に流れ、その後大倉山にぶつかって流れを南東方向に転じて、橘橋から下流は暗渠となって海へと流れています。



図-1 宇治川周辺の活断層分布図

■ 宇治川上流部に築造された溜池群

江戸時代の神戸村の姿を描いた『神戸村絵図』（東は三宮神社付近から西は花熊村との境界付近までが描かれている）によると、当時、平野部の西国街道沿いにはかなり密集して集落がありましたが、山手の丘陵地には耕地が広がっていたようです。

当地を流れる宇治川は急流河川なので、降った雨はごく短時間で海に流れてしまい、しかも瀬戸内海式気候なので年間降水量も 1,250mm 程度です。従って、稲作をするためには河川水を貯留する溜池を築造する必要があります。

『神戸村絵図』には、他領の池も含めると大小 19 の溜池が描かれていますが、宇治川流域では、中宮（なかみや）村の北に、花熊・神戸・宇治野・中宮の 4 ヶ村が共有する井垣池が描かれているほか、宇治川上流の再度谷川には、現存する狸々池や現存しない深谷池（西池）、堀切池が、右支川の平野谷川には、上流から順にちうご池（中后池）・ねりまつ池・菩提池・仏坂池・新池がありました。

また、明治 7（1874）年作成の『再度谷の溜池・田畑地の絵図』（図-2）には、4 つの溜池（狸々池、深谷池、堀切池、井垣池）が描かれています。

なお、この絵図で川に沿って 1 番地から 20 番地まで記されているのは水車場です。

① 狸々池

別名「鯛池」と呼ばれ、下流の花隈・神戸・宇治野・中宮の4ヶ村に水を送るために築造された溜池です。

大正3(1914)年には、満水面積が3反3畝(3,300m²)あったといわれていますが、現在は写真-1のとおりほとんど埋まっています。

② 深谷池(西池)

花隈・神戸・宇治野・中宮の4ヶ村が共有する溜池。享保13(1728)年普請。西池とも呼ばれていましたが、昭和13(1938)年7月の阪神大水害で決壊・流失、その後跡地に直轄工事として砂防堰堤(宇治川堰堤)が築造されています。

「狸々池の碑」(写真-2)を撮った後、直線距離で約200m西にある宇治川堰堤の写真を撮りに行きましたが、木が繁茂していて木々の間からわずかながら石積堰堤の下流面が見える程度だったので、写真撮影はあきらめました。

③ 堀切池

明治21(1888)年4月、大日本帝国参謀本部陸軍部測量局発行の「兵庫」(1/20,000)では、堀切池はすでに埋め立てられています。

④ 井垣池

花隈・神戸・宇治野・中宮の4ヶ村が共有する溜池。村域北辺の高地にあった大きな池で、「摂津国花熊之城図」には花熊城の堀に繋がる水路と共に描かれており、古くから村の水利の中心だったようです。

池は明治40(1907)年に埋め立てられ、そこに明治天皇御小休所が建てられましたが、現在は諏訪山公園のグラウンド(写真-5)となっていて、往時の池の形状をよく留めています。

なお、平野谷川にあった菩提池も、近世の中頃に豪雨により発生した山崩れのためか半分ほどが埋まってしまったようです。

また、明治21(1888)年4月、大日本帝国参謀本部陸軍部測量局発行の「兵庫」(1/20,000)では、奥平野浄水場から北へ約1kmの平野谷川に3ヶ所あった溜池(恐らく菩提池・仏坂池・新池)が、大正2(1913)年2月、大日本帝国陸地測量部発行の「神戸」(1/20,000)では1ヶ所(恐らく菩提池)になっています。



写真-5 諏訪山公園グラウンド

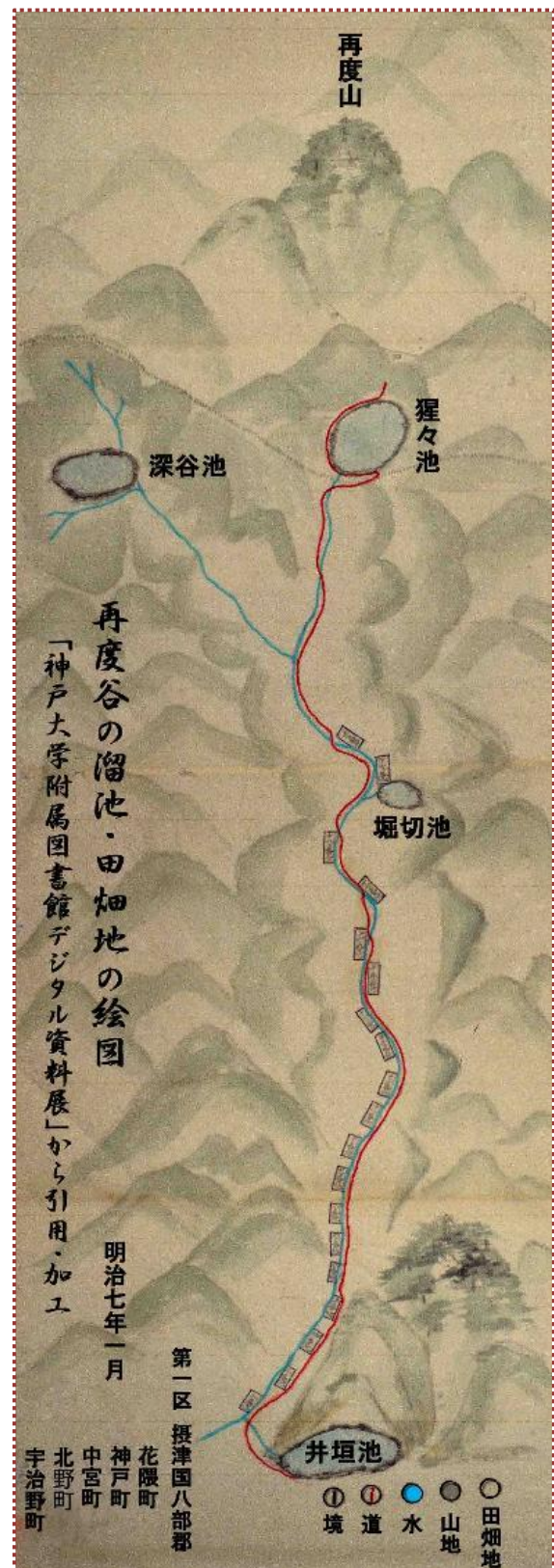


図-2 再度谷の溜池・田畑地の絵図

■ 阪神大水害で明暗が分かれた狸々池と深谷池

慶応3年12月7日(1868年1月1日)に神戸港が開港、明治中期以降急速に市街化が進み、港に近い宇治川流域においても、農地の急激な減少にあわせて農業用水の需要も減少します。

再度谷川上流にあった溜池は、明治時代になると多くは埋め立てられて、昭和初期に残ったのは狸々池と深谷池だけになり、維持管理もおろそかになってしまいます。そのような中、昭和13(1938)年7月5日、未曾有の大災害が発生します。阪神大水害です。

宇治川流域でも山津波が発生し、上流域にあった池を直撃しますが、狸々池と深谷池で大きく明暗が分かります。狸々池は、かなりの土砂が流れ込んだものの堤防の決壊は免れ、大量の土砂を貯め込んで下流域の被害軽減に寄与しましたが、一方の深谷池は堤防が決壊、濁流が市街地を直撃し被害を拡大させたといわれています。



写真-6 神戸駅の東、省線高架下の惨状、
左上の建物は「三越」



写真-7 元町通6丁目
「三越」前の惨状



写真-8 元町通商店街の惨状

(上の写真3枚いずれも『六甲山災害史』から引用・加工)

■ モノローグ

溜池の目的はもちろん利水ですが、使い方によっては治水にも一定の効果が期待できます。ただ、大前提は、堤体の安全性が常に担保できているということです。

阪神大水害において、宇治川では深谷池の決壊と河川の暗渠化が被害を拡大させたといわれています。この続きは次号で！

カルガモ

カモ科マガモ属に分類される鳥類。くちばしは黒く、先端部は黄色でよく目立つ。脚は橙赤色。日本においては北海道を除き留鳥である。そのため、春夏も日本にいて繁殖をする。4～7月に繁殖期を迎え、集団でコロニーをつくることもある。水辺の草むらや竹藪、休耕田などに営巣、時には水辺からかなり離れた場所に巣をつくることもある。卵を抱くのはメスだけで、オスはその間離れた場所にオス同士で暮らす。10～12個ほどの卵を産み、26日ほどで孵化する。ヒナは生まれてすぐに歩くことができ、全員が生まれたらすぐに水辺に移動する。河川、池沼、海上など水辺に生息し、餌は植物質で、草の葉・茎・草の実などを主食にしている。



写真-9 狸々池のカルガモ

【参考資料】

- 1 『神戸市水害誌』 神戸市編 昭和 14 年 7 月
- 2 『六甲砂防六十年史』 六甲砂防工事事務所編 平成 13 年 3 月
- 3 『表六甲河川・宇治川』 神戸土木事務所 平成 4 年 3 月
- 4 『宇治川の桜並木と宇治川公園の桜』 神戸観光壁紙写真集 HP
<http://kobe.travel.coocan.jp/kobe/ujigawa.htm>
- 5 『会下山断層・長田山断層』 地震調査研究推進本部 HP
<https://www.hp1039.jishin.go.jp/danso/Kobe2A/3-1-5.htm>
- 6 『兵庫の地理～地形でよむ大地の歴史』 田中眞吾 平成 19 年 12 月
- 7 『デジタル資料展～「村上家文書の世界 ～近世×神戸×農村～」』 神戸大学附属図書館 令和 3 年 10 月
<https://lib.kobe-u.ac.jp/support/exhibition/digital2021/>
- 8 『古地図で見る神戸 昔の風景と地名散歩』 大国正美 平成 25 年 11 月
- 9 『六甲山災害史』 社団法人兵庫県治山林道協会 平成 10 年 8 月
- 10 『郷、走水神社、花隈町、再度筋町』 フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』
- 11 『唯一渡りをしないカモ「カルガモ」』 身近にすむ野鳥図鑑 HP
<https://www.storiedigiocattoli.net/karugamo/>

※発行：令和 6 (2024) 年 7 月 『ひょうご水百景』 No.200

改訂：令和 8 (2026) 年 8 月 『ひょうご水百景』 No.200